

【山里】やまざと

中国の文人たちによる隠遁思想(俗世間から離れ崇高な精神を求める生活)の影響なのでしょうが、平安時代以降、貴族たちは小野・嵯峨・桂・宇治など都から程よく離れた地に別荘を建て、世俗から解放された生活を求めるようになりました。(折々の銘嵯峨野参照)

山里とは本来、山間部にある集落のことですが、京の都周辺の山間にある貴族達の別荘も山里とよばれました。

平安時代には山里はわびしさ、さびしさの象徴として和歌や『宇津保物語』『源氏物語』に登場しています。

中には、・山里は物のわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

『古今集』よみ人しらず

と、俗世間の煩わしさもなく住みよいと、本音とも強がりともとれる歌もあります。

「山里」は鎌倉時代に入ると、特に西行など隠者の歌に多く用例が見られます。

その後、山里と呼ばれる草庵は市中にも建てられるようになりました。

後柏原天皇の笙の師であった雅楽家 豊原統秋(1450-1524)が邸内の庵を山里庵と名づけたのはその典型といえるでしょう。

侘茶の流行により、山里とよばれる草庵は数寄屋造りと呼ばれ、茶室にその様式美を發揮しました。これら茶室は山居の風情をかもし出すよう設計され桃山時代より全盛を迎えます。

「わびし・わぶ」は侘び茶の「侘び」の語源ですが、平安時代の「わびし・わぶ」は一般的に「不本意・辛い・みすばらしい」などネガティブな意味だったようです。

山里が山間部の集落から貴族の別荘、市中の山居へと用例が広がるにしたがって「わびし・わぶ」の意味も変化しているようです。

「侘び」の用例を歴史的にたどると面白いかもしれませんね。

「藪にある粗末な樹皮や木材を自然のままに使い、一定の様式に従って造られた粗末な小屋における隠遁的孤独を保つのに適するようにする。(中略)またその場所に適さない雑談はいっさいやめて、そこに見られる僻地のあらゆるものの形態、調和、種類についても観照するためのものである。こういうわけで、この建物なり、その場所で飲食その他すべてのことに使う道具なりは、宮廷にあるものと同じような、優美で完全で、形がよくて、光沢のあるものを甚だしく嫌い、また山中や僻地のものを使うのでもなくて、無造作に自然らしく造られた、粗末でゆがんだものなどが使われる。」

ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻 江馬務他訳 岩波書店1967

ロドリゲスは桃山時代に来日したイエズス会の宣教師です。彼は日本の風俗習慣を興味深く観察し優れた洞察力で捉えています。近代未だ遠き時代、ポルトガル人が極東の文化に興味を示し、極めて正確に草庵茶室の意味、茶の湯の精神を把握していることには驚かされます。

豊臣政権の象徴である大坂城の本丸北側松林に囲まれた所に草庵茶室が設けられ山里丸と呼ばれました。二畳隅炉の極侘びた茶室であつたらしく、毛利輝元・神谷宗湛など重要な大名や豪商がここで秀吉自らの接待を受けたことが知られています。

大坂城といえは大規模な対面所を備えた大城ですが、本丸のすぐ裏に山里丸を設けたことは、正式な対面所と小座敷をうまく使って諸国の大名、商人を操った秀吉の政治手腕が想像できます。威圧的なほど豪華絢爛を誇る美意識の屋敷の一方で侘びた草庵が静かに花開く、まるで桃山の文化を象徴するかのよう城内ですね。

同名の茶室は伏見城、聚楽第、肥前名護屋城、江戸城にも建てられていることから山里の名は固有名詞というよりは草庵茶室の総称として用いられていたようです。

「山里」という銘の茶杓・竹花入などの茶道具は数限りなくあるでしょう。これほど流派を問わ

ず季節を選ばず、それでいて四季折々の風情をかもし出す銘が他にあるでしょうか。冬に使える雪国の囲炉裏の炎を、春に使える山桜を、夏に使える万緑の野を、秋に使える鹿の悲しい鳴声を想わせる銘ですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~